

# 白金藪

九月号



平成26年9月発行 第43号

白金葭定例会案内（＊は吟行句会）

十月十七日（金） 12:00 ～ 15:00 （アビスタ第三学習室）

兼題：体育の日、無患子むくろじ

＊十月三十一日（金） 10:00 ～ 17:00 本郷吟行句会（別案内状）

（文京シビックセンター地下一階学習室）

十一月二十一日（金） 12:00 ～ 15:00 アビスタ第五学習室

兼題：蒔蕪掘る、木の葉髪

十二月十九日（金） 12:00 ～ 15:00 ア第五学習室

兼題：神楽、都鳥

体育の日、無患子の参考句（10月17日分）

老猫の部屋逃げ回る体育の日

気を付けて体育の日の手を挙げる

体育の日の固過ぎるジャムの蓋

無患子の木末透して空の青

無患子や母と遊びし手の湿り

無患子てふ木の実拾へり良き名なり

無患子の降れるを見つめ道祖神

無患子のたわわの実より空開く

無患子の弥山嵐に吹き騒ぐ

正木節子

谷山花猿

三木基史

辻川時夫

小林有希

阿波野青畝

月例会会報（<sup>14</sup>／9／19 8名欠3名 宵闇、竹の春）

飯田孝三

手土産に羽二重団子竹の春

名月やややに背<sub>ナ</sub>屈む観世音

鶏頭の丈に日当る子規忌かな

宵闇のぼぼと灯の入る塔の形

大満月たしかに兔餅を搗く

増田陽一

擦り切れて夏惜しみをりきりぎりす

浴槽の捨ててありしが竹の春

宵闇のまな板に烏賊置きにけり

秋燕の惑ひてをりぬ皿の上

鯉ゆるく水疲れして夏終る

光成高志

宵闇の粃殻焼く火燃えあがる

竹山に代々住んで竹の春

白鷺の百羽を連れて稻刈機

宵闇や航空灯の過ぎゆくも

捧げされ山車轡みそなほす神輿さま

秋雨に暮るる新宿音の街

宵闇や発車のベルのけたたまし

秋茄子きのふと違ふ皿に盛る

若者ゆく去来の墓竹の春

宵闇や足元灯す湯壺まで

竹の春芋錢旧居の硯箱

宵闇や竹のさやぎに人送る

花槿豆腐片手の立ち話

ひぐらしや酢の香ただよふ夕厨

山の湯に首までつかり法師蟬

かつば碑にさやぐ百幹竹の春

宵闇やよいさよいさと神輿揉む

目玉焼にももいろの塩秋澄めり

光 みち

白桃のマニキュアの手に洗はるる  
稲刈りて夜は祭りの煮炊きかな

筒井筒の恋は古りにし竹の春

妻病みて子供に戻る雁の空

深秋を思ひ見舞はねばと思ふ

退院のもうなき妻の夜長かな

宵闇を来し眩しさの机かな

吉羽多美子

孫が描く吾が顔ゆがむ敬老日

片言の果てしなき子と竹の春

宵闇に帰らぬ人を思ひをり

宵闇に靴音消へてしまひけり

銀木屋香りに引かれ後戻り

倉田紀子

宵の闇厩舎平らに馬眠る

がまずみも活けて厩舎の月見かな

竹の春光源氏が来る気配

松村幸一

浅野正美

青木啓泰

つくつくや最後あがきを言つて止む  
歴史書に少し嘘あり青葡萄

武者昭七

3 3 秋茄子きのふと違ふ皿に盛る  
歴史書に少し嘘りあり青葡萄  
歴史書に少し嘘あり青葡萄

みち 啓泰

宵闇や足の急かるる無縁坂

2 白鷺の百羽を連れて稲刈機  
白桃のマニキュアの手に洗はるる  
若者ゆく去来の墓へ竹の春

高志 紀子

里山を蔽ひ尽くして竹の春

2 宵闇や足元灯す湯壺まで

みち //

車椅子寄せて見上げる百日紅

2 宵闇のまな板に烏賊置きにけり  
妻病みて子供に戻る雁の空

陽一 幸一

雨晴れて虹天空をまたぎけり

2 宵闇やよいさよいさと神輿揉む  
片言の果てしなき子と竹の春

紀子 幸一

マンションの窓に灯一つ良夜かな

2 宵の闇廐舎平らに馬眠る

正美 紀子

小山陽也

喫茶店西の店前竹の春

2 宵闇や歩行<sup>あし</sup>の急<sup>せ</sup>かるる無縁坂

啓泰 昭七

下町は宵闇朝迄つづくなり

2 宵闇や足の急かるる無縁坂

孝三

庭にあるすすき漸く穂が出たり

1 孫が描く吾が顔ゆがむ敬老日  
かつば碑にさやぐ百幹竹の春

正美 紀子

小さき柿漸く食べ頃二つ三つ

1 浴槽の捨ててありしが竹の春

陽一 昭七

白粉花<sup>おしろい</sup>の群れて咲くなり人に触れ

1 里山を蔽ひ尽くして竹の春

みち

選句結果 (数字は入選数 左添書きは添削句)

1 宵闇の発車のベルのけたたまし  
宵闇や竹のさやぎに人送る

多美子 幸一

4 竹の春芋錢旧居の硯箱

1 深秋を思ひ見舞はねばと思ふ

多美子 幸一

3 竹山に代々住んで竹の春

1 深秋を思ひ見舞はねばと思ふ

高志 多美子

3 花槿豆腐片手の立ち話

1 深秋を思ひ見舞はねばと思ふ

多美子 幸一

1 宵闇に帰らぬ人を思ひおり 正美

1 宵闇に帰らぬ人を思ひをり

1 鶏頭の丈に日当る子規忌かな 孝三

1 宵闇に靴音消えてしまひけり 正美

1 宵闇に靴音消へてしまひけり 幸一

1 退院のもうなき妻の夜長かな 多美子

1 ひぐらしや酢の香ただよふ夕厨 孝三

1 宵闇のぽぼと灯の入る塔の形 啓泰

1 がまずみも活けて厩舎の月見かな 正美

1 銀木屋香りに引かれ後戻り 多美子

1 山の湯に首までつかり法師蟬 陽一

1 鯉ゆるく水疲れして夏終る 孝三

1 大満月たしかに兎餅を搗く 陽也

1 白粉花群れて咲くとて人にふれ 紀子

1 白粉花おしろひの群れて咲くなり人に触れ 昭七

1 雨晴れて虹天空をまたぎけり 陽也

1 喫茶店西の店前竹の春 幸一

1 宵闇を来し眩しさの机かな 昭七

1 車椅子寄せて見上げる百日紅 陽也

1 車椅子寄せて見上げる百日紅 啓泰

1 下町は宵闇朝迄つづくなり

秋燕の惑ひてをりぬ皿の上 陽一

捧げされ山車みそなはす神輿さま 高志

目玉焼にももいろの塩秋澄めり 紀子

マンシヨンの窓に灯一つ良夜かな 昭七

宵闇の靱殻焼く火ちよろりちよろり 高志

宵闇の靱殻焼く火燃えあがる 孝三

名月ややや背ナ屈む菩薩佛 陽也

名月やややに背ナ屈む観世音 陽也

庭にあるすすき漸く穂が出たり 啓泰

竹の春光源氏が来る気配 陽也

小さき柿漸く食べ頃二つ三つ 陽一

擦り切れて夏惜しみをりきりぎりす みち

秋雨に暮るる新宿音の街 幸一

筒井筒の恋は古りにし竹の春

### 一句鑑賞

宵闇や足の急かるる無縁坂 光成高志

無縁坂とは、東大医学部裏手の鉄門から、上野不忍池 昭七

に向かつて下るひっそりとした坂道を云う。鷗外の「雁

の中の一節に「岡田の日々の散歩は大抵道筋が極まつて

いた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお歯黒のような

水の流れ込む不忍の池の北側を廻って、上野の山をぶら

つく。」とあるその無縁坂である。さだまさしの「無縁坂」

という歌にも出てくる。「忍ぶ不忍無縁坂」と作詞している。その無縁坂を足が急かされるように降りてゆく。月の出の遅くなった宵闇に。宵闇の闇は六道の闇に通ずる怖さがある。そこまで連想するのは勇み足かも知れぬが、そこまで自動的に連想させる宵闇と無縁坂の響き合いがある。半月が出たあとの無縁坂はどうであらうか。

### 竹の春芋錢旧居の硯箱

多美子

牛久市の牛久城址に小川芋錢旧居が残されている。雲魚亭という。そこを訪ねた作者は中に河童を描いたであろう硯箱が展示してあったことに感興を覚えて、竹の春と取り合わされた。入口付近に「改善一步」と刻んだ道標が立っていて、その後ろには孟宗竹の竹藪があり、青々とした竹の春の記憶が甦ったのだ。

### 片言の果てしなき子と竹の春

正美

この句を読んで私は直ぐ思い出した。以前見た幼児の記憶と大阪で聞いた話をである。一歳になるかならないかの幼児が歩いてきて、自動販売機の前で、しきりに何か喋っているように見えた。口が頻りに動いているが、言葉にはなっていない。母親が近づいて来て、何を言っているか、私もわからないのよと私に言った。非常に活発に動く子が良く舌を繰っている様を見た。言葉より行動が先にあつて言葉が後からついてくるのではなからうか。知的発達には言葉によって出来るのか行動によって出

来るのかと考えて、行動が先にあるのだと思った。夏初めに筍が出てぐんぐん伸びて今年竹となる。秋にはその勢いは葉にもでて緑が美しい。まわりの木々は紅葉になり草は枯れ色が出てくる頃だからその緑が余計に美しく感じられる。カトコトではあるが、言葉を持ち始めた子の知的発達も著しいものがあり、あつという間にしゃべり出すのである。竹の春と言葉を獲得した子の響き合いは新鮮で新しみがある。秀句と思います。

### 宵闇や発車のベルのけたたまし

みち

向いのホームの発車ベルがじりじりりとけたたましく鳴る。考え事をしながら電車を待っていた作者の心理が「けたたまし」と感じたのである。宵闇の空気を二分するような突然のベル音であったのだ。宵闇が心を敏感にしているのである。現在は発車ベルがうるさいと言う人もあるので、発車メロディに変ったとか。

### 宵闇やよいさよいさと神輿揉む

紀子

紀子さんによると、布佐の秋祭りの句であるとか。私も何回もこの祭りを取材したことがある。その通りと合点して〇をつけた。「揉む」は重畳の感があつてややうるさいという選評もあったが、浅草の三社祭の神輿にも通じるので、これでいいと思います。掛け声は祭りによって違っても、掲句の場合は宵闇の yoi 音が三音となり神輿を担ぐ若衆の勢いに反響していると思います。宵

闇をものともしない祭りの賑やかさ・提灯の中、天空を見上げた宵闇の感慨が思われます。神輿が神社に納まる頃には弦月があがっていることでしょう。

### 宵闇のまな板に烏賊置きにけり

陽一

外の宵闇とまな板に置かれた烏賊、いやに生々しいではないか。「置きにけり」と過去の詠嘆と取れるように書いてあるので、余計に宵闇とまな板の烏賊が響き合う。何故というに、烏賊は夜行性であり、暗いところが好きなのに、透明電球を沢山吊った眩しいまでに明るいう船に來られたのではたまったものでなく、明りを避けて船の影に集まったところを引つ掛けられて水揚げされてしまう。宵闇の闇に帰りたいなあと思うも、まな板の鯉同然にて断末魔を待っているなんて。人間さまと烏賊とはなんとかなしい関係なんだ。嗚呼あはれ。

### 一句鑑賞

飯田孝三

### 竹山に代々住んで竹の春

高志

里山の懐に点在する家々が大小の竹山・竹藪に囲まれる。「竹取物語」や「舌切り雀」を生んだ日本の原風景人々の心の古里である。そこから七夕や竹馬の竹を切り出し、その竹で水鉄砲や竹とんぼを作ってあそんだりもしただろう。眼前、親竹も若竹も青々と繁り秋の日に波打つ。「代々」が眼目。父祖の地の簗のさやぎと身内をめ

ぐる血とが響き交うのだ。かつては市街地を外れると見かけた景色だったが、今では珍しい。他方、地方では荒廃が進む。それだけに、いい尽せぬ懐かしさがある。

### 宵闇の発車のベルのけたたまし

みち

名月の後は、日ごと月の出が遅くなる。宵のうちの月のない暗闇が「宵闇」。暗いホームに突然、発車のベルが鳴り響くのである。「けたたまし」がずばり。その場の響きが耳元で高鳴るではないか。昼を斯く大都会の駅ではなく、星を戴く駅ホームだろうか。宵闇といえど近世以後は、「君恋し」、「人恋し灯ともしころ」、そんな気分を、突如、発車ベルが吹つ飛ばす。思わず身動きする。その辺の俳諧の妙がさわり。別句「若者ゆく去來の墓へ竹の春」、古びた小さな墓と元氣な若者との対照が妙。墓「へ」が若者の足並みを目に見せ、竹林のそよぎが映える。

### 片言の果てしなき子と竹の春

正美

片言はたどたどしい言葉、その言葉づかい。元來、幼児言葉をいうだろう。こどもは、ある時期、意味不明瞭なことばでさかんに話しかける。母親だけが分かる、いや、分からないこともある。それがあつた日、突然、ちゃんと話したのである。竹は春、夏の繁殖期を過ぎ、秋には若竹、親竹とも青々と枝葉を繁らせる。まこと「竹の春」である。子の成長ぶりと季のこころが通い合い、

k、t音とA音を繰り返すリズムも爽やかで明るい。

## 花木槿豆腐片手の立ち話

多美子

木槿の花の下で、その垣根沿いでもいい、主婦が豆腐を片手に立ち話をしている。夕餉支度前のひと時である。この頃は主夫ばかりだが、それでは絵にならない。主婦は二三人がいい。昭和の一頃を思い出させる光景である。く片手「の」がうま、臍である。目の当たりの情景に片手に豆腐を提げた婦人たちを浮き彫りにする。これが「に」だったら説明、平板。

## 白桃のマニキュアの手に洗はるる

紀子

マニキュアは、云わずもがな紅<sup>ルージュ</sup>。近頃は、その多彩ぶりがもてはやされるようだが、それではない。まるまる産毛透く白桃が、爪紅の指先で水玉を弾く。馥郁、淫刺にして艶。別句「かつば碑にさやぐ百幹竹の春」の「かつば」は、芋銭の河童。奇怪な面貌と竹笹のさやぎが妙に通い合い、爽快な調べが巧まぬ俳諧を漂わせ、「竹の春」の生気がめでたい。(荆妻が云うには、今はふつう紅いマニキュアはしない、透明のつや塗りでは。さすれば、清冽の気が漲り、俄然「洗はるる」が面目。戦中派はどうも古くて。)

## 一句鑑賞

### 筒井筒の恋は古りにし竹の春

武者昭七

幸一

筒井筒の傍らでままごと遊びなどに興じた少年と少女

がやがて恋を知り歌を交換し合つて結ばれたというのは有名な伊勢物語の一段である。此の句、そんな古物語に託して、過ぎ去った少年の日の淡い恋情を、盛んな竹の春を前にして懐かしんでいるのだ。「古りにし恋」は遠い昔の恋。懐かしくもあり切なくもある。甘やかな郷愁の漂う句である。

## 竹の春光源氏が来る気配

啓泰

上代の人々は風のそよぎ、葉ずれの音にカミの訪れを感じて、あるいは歓喜し、あるいは畏れたという。それらはヒトを超えたモノの来臨の前触れであり予兆であつたからである。(たとえばおなじみの歌舞伎の「ヒュードロドロ」なんてのを思い出せばいい) この句はそんな民族の名残を感じさせて面白い。勢いよく伸びた竹の葉擦れに恋人の訪れを感じとつて胸弾ませている王朝女性を想像するのはどうだろう。楽しい想像だ。「写生」といい「客観」というのが俳句の本道であるにせよ、現実を越えた幻想世界に遊ぶこともまた文芸の本来である。

## 秋茄子きのふと違ふ皿に盛る

みち

はじめて秋茄子が食卓に登場する日だ。新しい季節がやってきた喜びが昨日と違う皿を作者に選ばせる。それは訪れた新しい季節に対する挨拶であり、もてなしである。作者のやさしさがにじむ。



鯉ゆるく水疲れして夏終る

陽一

夏の間元気に泳いでいた鯉もそろそろ疲れが出たせいか秋冷とともにその動きがゆるくなってきた。中七までの物憂げなリズムを「夏終る」という強くきつぱりとした語調で絞めて見事。

白鷺の百羽を連れて稲刈機

高志

落ち穂をついばむためだろう数知れぬ白鷺が稲刈機のとを追ってひしめきあっている。「百羽を連れて」と稲刈機を主体に据えたことで刈り取り作業の動きが生きた青い空、黄金色の稲、真っ白な白鷺。印象派の絵を見るような明るい農村風景である。

河童碑にさやぐ百幹竹の春

紀子

河童碑は茨城県牛久に住んで明治期から大正期にかけて活躍した日本画家小川芋銭の記念碑。特に河童を漫画風に描いて人気があった。僕は尋ねたことがないのでわかりかねるけれど周囲を深い竹林が囲んでいるのである。「さやぐ百幹」という中七が深い竹林の風に鳴る音と林立する太く逞しい幹の佇まいを目前に浮び上らせる。

竹の春芋銭旧居の硯箱

多美子

旧居の文台の上に置かれた硯箱であろう。その一点に作者の目が注がれている。一句全体が体言のみで成り立っているために深い静寂感が醸し出されているのが感動的である。

一句鑑賞（42号分）

飯田孝三

舟底に音蓮の根の育ちをらむ

陽一

蓮見吟遊のひと時、舟底のかすかな音にふと耳を澄ます。蓮は、年々花咲き花移り、その間も、水底の泥中深く刻々根を張り、芽を育む。年輪ひそむ心耳にその音が届くのである。ある齢になつて初めて見え、また聞こえてくるものがある。今更、それに気づくのだが、上五、  
「に」に、舟底に今し耳を凝らす思いが見てとれるのである。

蒲の穂のまだ硬くしてきりたんぼ

高志

なるほど蒲の穂の形はきりたんぼにそっくり。だからといって、ただの見立ての句ではない。きりたんぼは、ご存知、古くから秋田に伝わる郷土料理。今ではスーパー等に並ぶが、かつてはその地の外では食べられなかった。きっと、学生の頃など若い時分に旅で口にしただろう。そんな日の思い出が俄かに甦る。今はまだ硬い穂もやがて時がくれば弾け、辺りに白い絮を飛ばす。蒲の穂は絮といえど「因幡の白兔」だが、戦後は国語の教科書にもならない。絵本で読んだか、母さんや家族に聞かせてもらったに違いない。父母在りし産土の一齣々々が臉に浮ぶのである。

あんぱんのやうな雲あり終戦日

みち

敗戦は悔しかったけれど、それは“欲しがりません勝までは”が終った日。実際、あんぱんを口したのはそれから何年ぐらい経ってからだっただろう。掲句、甘味飢えの民の泣き笑いの図が目に見え。地の悲喜劇を下に、悠然、あんぱん雲が空をゆく。それを、く「あり」と鮮やかに切り返した器量がまた天晴れ。飄々のユーモアである。「終戦日」の口調のやわらぎがいい、「敗戦日」ではあんぱん雲が皺む、民草は萎み放し。蛇足だが「終戦日」はその当日と年々同日に通じる。なんなん七十年の時をいだいた、ふところ深い一句である。

極楽の端かもしれず蓮の花

敬司

もう十年足らずも早く生まれていたら、兄達のように、大勢、戦塵や海の藻屑と化していたに違いない。昭和一桁はつくづくそう思う。それを免れ、戦後はかつてない経済繁栄に浴し、まづは安穩に過ごしてこられたのは、いまだに地上、水域に紛争・戦闘が絶えぬ人間の歴史上、類見ない僥倖であるといえよう。生きながら極楽の端にいるわけである。先人達の苦勞や可憐<sup>あたら</sup>いのちを散らした数多の兄達の胸中を思うと、なんとも相済まない気持ちがある。そんな読み方もできるだろうか。戦後七十年目、八月十五日恒例の蓮見艇上の吟である。

象鼻杯象の鼻ほど高く挙げ

昭七

象がもつとも象らしいのは、長い鼻を掲げる時。天上は大人の座、その妙なる香氣に憧れるのだろうか、それとも、遥かに海をわたってくる故郷の風に応えるのだろうか。「猪の鼻もありたる象鼻杯」（猪牙）ではさまじならぬ。さあさ象鼻杯、蓮の葉を高々と挙げて、乾杯しよう。カンパニー！喝采喝采。二次会の句「転がれる蟬のむくろの静かなる」は、周りが静かだということではない。声を立てず、身動きもせぬ落蟬のことでもない、落蟬を目に止めた心の裡、肅然たる思いをのべるのだ。奥が深い、内観の句である。「静か」は「しづか」もあるだろう。（平 26・09・03）

一句鑑賞（41号分再録）

増田陽一

短夜の無限にながき介護かな

幸一

「老老介護」の時代とよく言われるけれど、まことに身につまされる句である。「短夜」と「無限」との対照に言葉の冴えがある。技巧だけではない。夜が明けても日が暮れても介護の日々は続く。否、続いて欲しい。そのなかで短夜のすぐ明けることが、少しほっとする慰めとなりそんな感じもある。お互いに頑張ろうではありませんか。翻ってぼくはわが身に降りかかった「老人」という役割に狼狽するばかり。（2014・07・25）

お便り広場（到着順、敬称略）

浮いてをる水すれすれの蛙の目（山田凡二句）

（H／26・8・23 山本百合子）

（浮いてゐる水すれすれの蛙の目（旭登志子）が最近の句にあり、元々 蛙の目越えて漣又さざなみ（川端茅舎）があり、いずれも、茅舎の句の類想でしょう。百合子さん、自句をお寄せ下さい。もしくは、本誌の句をお書き下さい。）

八月号拝受致しました。編集後記にあるやうに句誌になりましたね。私の分は除外した方が良かったと思います。遠慮なさらずにして下さい。しかし皆様見事です。

添削の分はたしかにぐーんと佳くなっています。終戦日は私は中学一年、今日からは灯下管制をしないで一晩中あかりがつけられると喜んだ覚えがあります。そして月末に焼跡にバラックを建てそこで住みました。一間の部屋でした。皆様の益々のご健康を祈ります。

（8・25 小山陽也）

蓮見吟行にお招きいただきましてありがとうございます。した。「白金葎」八月号拝読させていただきました。内容のすばらしさに感激いたしました。沼を船で渡ることも、蓮を手にしたり味わったり、酒盛りしたりしまして、俳句など全て初体験の雅な一日をありがとうございます。私の句「蓮うき葉水玉うごき空高し」を小金井市の句会

に出句済みです。

（8・26 本山まいこ）

玉誌「白金葎」第42号を有難く拝受。p8の「みんなやなぜか生きたし今少し」（幸一）の句が心に沁みます。「熱地獄それでも矢張り今がいい」（由紀夫）とでも書きたいです。地震や水害などがあっても戦中戦後のことと比較すると今は極楽の感強し、と言いたいです。太平洋大戦と比較すると小事細事です。東日本大地震も原発の爆発も比較すると細事も細事。被災者には同情を禁じえませんが・・・ご健筆を祈念し皆様のご健康をお祈り申し上げます。草々（H 26・8・25 河村博巨）

やつと涼しくなりましたね。先日は沢山のお野菜をいただきましたありがとうございます。丹精こめて作られたと思うとパクパク食したらバチが当りそうですが、そのパク・・でした。白金葎八月号は沢山の方が参加されてますます充実というか句が醸すかほりがしました。うまく云えませんが好きな句をとり出してみました。

蓮見舟天気晴朗なれど波高し

あんぱんのやうな雲あり終戦日

風の道葉裏白くし蓮見舟

手賀沼やあやめに替へて蓮の花

大仏のお顔埋まる青葉かな ㊦なだしょうろ 景太きすやか、夏空の金星見てをりぬ

みちさん！ちよつと楽しくなりました。今月の私の句

で 秋雲のひと刷けかかり昼の月 がありました。同じ感慨にうれしくなりました。

みち様 高志様に宜しくと。ところろ眠くなりすこい字でごめんなさい。お礼のつもりで書いています。読み捨て下さい。

(8・22 倉田紀子)

御葉書頂きました。御親切にどうもありがとうございます。皆様とはだんだん遠くなる感じがです。九月は構造の根本、笹崎、武井さんと会います。二回目です。明るい話題にするつもりです。今はやめています。たまた「日経アーキテクチャー」「科学」等眺めて捨てています。26日ボケの面接がありました。年相応のやうです。来月にわかるやうです。根気がなくなりました。朝夕の雀へのお米やりが日課です。益々御活躍を祈ります。

(8・29 小山陽也)

光成高志・みち様

恒例の蓮見舟吟行に加われず残念でした。海外小旅行に出て帰ってみると、広島地方が洪水、山崩れのひどい被害をうけていました連日のテレビ、新聞の情報では、高志・みちさん夫妻のご郷里に災害は及んでいないようですが、如何だったでしょう。さぞ心配されたでしょう。遅ればせ、お見舞い申しあげます。『白金葎』八月号を頂戴しました。作品、鑑賞の充実ぶりを今さらに諾いました。「編集後記」に全く同感です。

(平26・08・29 飯田孝三)

(右お見舞い文、ありがとうございます。お察しの通り、今回の土砂災害は広島市の山際の宅地造成地を襲った土石流によるものでして、私らの郷里とは離れています。先の東日本大地震といい今回の土石流災害といい、私の仕事としてきた分野でありまして、俳人生活に入った途端、自然の猛威を受けているよう、先の荒鵜に見られているような心持は依然として残っています。)

右、第42号蓮見舟吟行句の後選鑑賞です。佳句の多い中から五句にかぎってお届けします。「お便り広場」、「俳窓評論纂」、「我孫子日記」の句にもたいへん惹かれます。漸く秋がきた感じがします。ご精吟のほどを祈りあげます。(平26・09・03 飯田孝三)

よろしくお願い申しあげます。いづこより黄金虫入る蓮見舟に共鳴しました。大分朝夕楽になりました。御自愛下さい。光成高志様(H26・9・14 青木啓泰)

つくつくはダラギンチョーと言って止む 啓泰

今月のはじめ家内が脳梗塞で倒れて、ずっと相総合病院に入院しています。八十二歳の認知症に加えて右半身麻痺、言語障害を伴い、いつ不測の事態がおきても、不思議でなくなりました。それでも見舞いに行くと瞳は私を追うようで、物も何か言いたそうで、握った手を握り返そうとします。相手が死ぬような病気になるまで、はじめて連れ合いがかけがえのない恋の対象だったと気が

付く。人間とは（自分とは）何て勝手な存在なんでしょう。つかぬ愚痴をのべました。短冊同封しました。間に合ったらで結構です。皆様によろしく。

高志様

（26・9・16 松村幸一）

### 受贈誌（九月号）

行滝の岩のむらさき岩煙草（俳四平 23 四月） 平野ひろし

縁先を蟹の走れり講者宿（〃） 〃

藪蚊打つ雑魚寝の誰の真つ赤な血（〃） 〃

パリ祭わが青春のジャン・ギャバン（飛行雲 72 号） 駿河岳水

徘徊者かもサンダルの老女佇む（〃） 〃

黒南風や七里ガ浜の白き波（あすか九月号） 山尾かづひろ

窯口のにこる火の香や時鳥（〃） 加茂眞智子

### こだま（飛行雲主宰 駿河岳水抽出）

高島屋一本物の鱈売る（白金葭 37 月号） 光成高志

### 俳窓評論纂

＊左のような陽一さんの句が主宰によって鑑賞されました。全文を転載します。

小熊座の好句

高野ムツオ

### 訣れ来て蛍蛾のある道路鏡

増田陽一

「訣」の字の初見は、宮沢賢治の詩「永訣の朝」によ

る。まだ高校生であつた頃だ。似たような漢字に「決」があり「決別」など別れの意味の言葉としてなじんでいたから、最初は少し違和感があつた。しかし、「決」は覚悟する、判断するという意味で、別れという意味は付随したものである。白川静の『字統』によれば「夬」は刃物をもつてものを切断し、えぐりとることを指し、それに「つまり川が付き、洪水などで堤防の一部を切り取るなど重大な決断をするということから「決」は決心などの意味に用いられるようになったようだ。「訣」は、ものを分離するに、言葉をもつて行うことである。つまり、言葉を発して別離するという意味になる。

掲句は相手が死者であるか生者であるか、明言していない。が、私にはどうしても前者に思えてしかたがない。生者との別れは無言との、たわいないこだわりのせいかも知れないが、それ以外にも理由がある。それは出会ったのが蛍蛾で場所が道路鏡であるからだ。蛍蛾は、別れが死者とのものであることを暗示する。蛍蛾は体長3センチ程度、飛ぶのは主に山間の昼間。だが、近年は住宅地にもよく現れる。真つ黒な前翅の先端あたりに太い帯状の白線があり、それらが喪服を連想させる。加えて頭部が赤く、それで蛍の擬態と言われていることが極めつけだろう。名もそれに由来する。和泉式部の歌を引用するまでもなく、蛍は人の魂の譬えだ。つまり、蛍蛾は永

決してきたばかりの人の生まれ変わり、いやその擬態と作者には思えたのだ。場所が道路鏡であつたというの、もさらに暗示的。鏡は彼岸此岸の出入り口である。道路もまた彼岸へ続くものであるのは指摘するまでもない。「道路鏡」という無機質な言葉が、詩の言葉として、これほど重みをもつた例を他に知らない。

(馬追や闇の映りし道路鏡

増田陽一

向日葵の突立道路鏡のこと

黒田甫水

枯山を吸ひ込むでゐる道路鏡

伊藤希眸

秋風を映す峠の道路鏡

大串章

など道路鏡を詠った俳句は少なくない。天狼の句でも今思い出せないが沢山あつた。陽一さんの句は、「蛭蛾のゐる道路鏡」と書いてあるので、道路鏡にとまつているのである。映っているのなら、「蛭蛾映る道路鏡」と書かれる筈だ。私は、悦子夫人と「ではまたね」とか言つて、訣れ来て道の曲がり角の道路鏡に蛭蛾が止つているのを見つけ、その懐かしさと凸面鏡に映る町並に、今の陽一さんの感慨を蛭蛾に喩えた寓言句だとみました。)

## 旅のうたを読む

### VII

#### ―若山牧水の旅―

#### 武者昭七

幾山川越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

中学生の頃であつたか初めてこの歌に触れた時の衝撃

を忘れない。生きることは「寂しさ」と分ちがたく結びついていること、寂しさは「生」の宿命であること、言葉にはならなかつたけれど、そんな思いが胸を切なくした。それ以来牧水は僕にとつて離れがたい歌びとなつた。今思えば感傷過多で少々気恥ずかしいような歌ではあるが感じやすい少年のころにはしみじみとしみるものがあつた。

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな  
明治四十三年信州小諸城跡での作。かたわらの秋草の花が私に語りかけてくる、「滅びさつたもののなんと懐かしいことか」と。この作の背後に芭蕉の夏草の句や藤村の千曲川旅情のうたがあるであろうことは容易に見取れる。ともに滅び去つたものへの手向けの歌であり、その底にぼくらのこころの奥底に宿る遠い先祖からの万象流転と無常の思いがある。

大正五年三十歳ころから牧水は多く旅に出て、特に各地の川のみなかみ(水源)を訪ね歩くことが多くなつたという。「みなかみ」は牧水のいのちの始原であり、そこに分け入ることはみずからの生命の始原に分け入ることであつた。牧水は次のように書く。「元来私は峡谷のしかも直ちに溪流に沿うた家に生まれた。そして十歳までを其処で育つた。そんなことのあるためか溪谷といふと一体に心を惹かれ易い」

身の故にや時の故にや此頃おほく溪をおもふ

何処いづとはさだかにわかねわが心さびしき時に溪流の見ゆ

溪を思ふは畢竟孤独をおもふ心か

巖が根につくばひをりて聴かまほしおのづからなるその溪の音

「みなかみ」は川のみなかみであると同時に、もっと本質的な意味で、牧水自身のうちにひそむみなかみであったらう、とは牧水ファン大岡信の言葉である（「若山牧水」中央文庫）。

(2014・03・15)

フランドルの旅十句 (08・16・21)

飯田孝三

フランドルは疾うに爽やか白い雲

ベコニアの花の絨毯グランパス

(グランパスはブリュッセル旧市街中心の広場。隔年、贅に花を

敷き詰め「花の絨毯」祭が開かれる)

デザートは大きワツフル祭過ぐ

人集だかり分けて馬車来る秋真昼

カリヨン鳴り出づる鐘楼雲は秋

蹲る缶にコインを黄葉<sup>きは</sup>の隈

右三句、ブリュージュ旧市内・マルクト広場

ブリュッセルの径に鵲に出喰はさず

ブリュッセル近郊・シント・アナ・ペーデ教会周辺

シルクハット廊を徘徊秋日ざし

ゲント・聖ニコラス教会(眼空ろな正装の老紳士である)

のんびりと牛が草食む青牧場

ブリュッセル・パリ沿道(牧場は年中青草である)

(平 26・08・31)

### 我孫子日記

8/15 例会。8/24 トライアスロン応援↓\*三匹獅子舞。

8/27 青戸。8/28 \*都庁舎の薪能。9/1 病院。9

/2 ↓ 3 \*上田城↓鹿沢温泉休暇村。9/4 久寺家中。

9/11 同上。9/12 \*萱吟行句会(南千住界隈)。9

/15 \*布佐秋祭。9/17 SOA。9/19 例会。

\*三匹獅子舞土の舞台に水を打つ

高志

讃迎と女獅子が舞へり秋うらら

みち

\*2 秋雨の中や高砂妻と観る

高志

尉と姥向き合ひ終る薪能

みち

\*3 真田村蕎麦と稲とが隣り合ふ

高志

秋雨の烟るや巨岩群るる森

みち

\*4 閑伽桶に秋雨残る延命寺

敏子

竜胆の供花に香煙可笑塚

一艸人

荷風碑文朗誦したり秋の蝶

高志

身に入むや腑分けせし人されし人

朋子

「舞」と一字刻みし墓石秋海棠

溝蕎麦を供華に添へたり浄閑寺

\*5 山車の裏面を吊つて前で舞ふ

鳳凰の稲穂を銜う神輿ゆく

こい乃

良子

高志

みち

## 編集後記

今月は陽一さん幸一さんのことを思いつつ編集を致しました。なぜというに、ご兩人とも奥様を介護されておられます。そういう境遇をもとめず、自己を冷静に見詰められ、句作され、本誌に投句されて居られます。俳人はかくありたいものと思います。俳句は生活と共にあるものですから、何を作ろうと自由であります。旅吟あり本歌とりのような所謂談林俳句あり、写生句あり、心象句あり、寓言俳句あり、暗喩句ありであります。私のような不器用なものは専ら季語の世界を広げる写生活俳句しか出来ませんが、それでも非常に楽しく思います。今日はこういう俳句が出来るか、新しく何を発見できるか、誰にお目にかかれるかを考えて目覚める時、自然にうれしさが湧上つてまいります。ほんとの人生とはこれなんだとつくづく思います。

そういうことで、ハガキ句報四十三報を掲載するスペースがなくなりました。芭蕉の軽み以後も同じく割愛し

ます。延宝年間の芭蕉の句、当時の江戸の点取俳諧をよく吟味することが、芭蕉の軽みへの出発点とと思っていますのでまだまだ草稿を続けます。未掲載の原稿が増えましたら、二十頁に挑戦致します。

白金霞 第43号 平成26年9月発行

編集・発行人 光成高志 (TEL & FAX 04・7187・1068)

発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17

表紙の題字…加納綾女。写真は9月23日の白金霞